



太洋電機産業株式会社（広島県福山市）

自動化時代にも求められる「はんだこて」で 福山から世界の現場を支える熱工具メーカー



本社屋外観

自動化が進む製造現場で、今も求められる「はんだこて」

近年、スマートフォンや家電の製造現場では、プリント基板への部品実装の自動化が進んでいる。それでも、不良の手直しや細かな調整など、自動化設備だけでは対応しにくい工程は今も残る。そこで使われるのが、はんだを熱で溶かして部品や配線をつなぐ「はんだこて」だ。広島県福山市に本社を置く熱工具メーカーの太洋電機産業株式会社は、そうした人の手が担う工程に欠かせない製品を手がけている。

同社は1965年4月の設立以来、自社ブランド「goot（グット）」で、はんだこてを中心に、はんだ吸取器、はんだ槽などを展開してきた。現在は一般ユーザー向けから工場向けまで、用途に応じた製品を幅広く送り出している。展示会展や輸出にも力を入れ、取引先は60カ国以上に及ぶ。

60年前に同社がはんだこての製造を始めた当時、国内には同業メーカーが30社近くあったが、現在はその数も半減し、同社は一般ユーザー向け製品では国内シェアの約6割を占めている。市場の変化の中で事業を継続できた背景には、製造現場の要請を踏まえ、求められる道具を形にしてきた点がある。



展示会展の様子

こて先まで自社で手がけ、多品種少量の要請に応える

同社の特長は、はんだこて本体だけでなく、作業性を左右する先端部の「こて先」まで社内で手がけている点にある。実際にはんだこてが用いられる現場では多品種少量の生産も多く、人の手による作業を通じた柔軟な対応が必要な場面も少なくない。対象物や工程によって、こて先に求められる形状や温度特性、作業性は変わる。だからこそ、用途に応じた細かな仕様に応えられる体制が重要になる。こうした要請を踏まえ、同社はこて先を内製化し、約3,000種類の図面を蓄積してきた。本体とこて先の双方を自社で一貫製造するメーカーは、世界でもあまり例を見ないという。



同社製造のこて先一例

さらに、営業担当者が現場で聞き取った声を製品改良につなげてきた点も同社の強みだ。たとえば「こて先の当てすぎによる部品破損を防ぐため、一定時間で知らせしてほしい」といった要望を技術部門と共有し、注意を促すアラーム機能や、未使用時に温度を下げて電源を落としたりする機能を加えてきた。こて先の仕様から使い勝手の改善まで、現場の困りごとに耳を傾けて製品に反映する姿勢が同社の競争力となっている。

福山市に根差したものづくりと社内文化

福山市は製造業の集積地で、部品を調達できる企業が身近に集まっている。多品種少量のものづくりを続けるうえで、必要な部材や加工の担い手がまかなえることは大きい。こうした地域の産業基盤があることが、同社が当地でもものづくりを続けてきた背景の一つとなっている。同社の「デジタル温調はんだこて」は福山ブランドに認定され、ふるさと納税の返礼品にも選ばれている。



福山ブランド認定製品

こうしたものづくりを成り立たせているのは、設備や立地だけではない。社内に根づく仕事への姿勢も、その支えになっている。象徴的なのが、社内で共有されている「ATMSK」(A:明るく、T:楽しく、M:前向きに、S:真剣に、K:謙虚に)という合言葉だ。

「働く時間は人生で最も長い。だからこそ嫌々ではなく、生きがいを持って、助け合いながら前向きに働きたい」と片岡社長は語る。そうした思いのもと、同社は技術の蓄積だけでなく、前向きに働ける職場づくりも大切にしてきた。

現在は、はんだ付け工程のデータを記録・活用できる次世代製品の開発も進めており、熱工具の技術を軸に事業領域のさらなる広がりを見据えている。数千種類のこて先に象徴される技術の蓄積と、人を大切にする社風をベースに、同社は今後も、福山市から国内外のものづくりの現場を支えていく。

太洋電機産業株式会社
代表取締役社長 片岡 義男 氏
本社: 広島県福山市山手町2丁目16番8号



ホームページ

